

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：25101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25420677

研究課題名(和文)チベット系仏教及び上座部仏教の洞穴僧院に関する比較研究

研究課題名(英文)Comparative study on the cave monasteries of Tibetan Buddhism and Theravada Buddhism

研究代表者

浅川 滋男 (Asakawa, Shigeo)

公立鳥取環境大学・環境学部・教授

研究者番号：90183730

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：ブータン高地では崖寺が各地に造営されており、本堂ラカンから離れた崖にの瞑想洞穴を営む。17世紀の国家形成以前、僧院に本堂は存在せず、ただ瞑想洞穴だけがあって、僧侶たちは長期間の瞑想修行に没頭していた。その伝統は今も受け継がれている。こうした瞑想洞窟の実態を理解するため計15ヶ寺で調査した。ソンツェンガンボ王による7世紀の吐蕃建国時に創建したと伝承される中央ブータンのジャンバラカンでは、本堂内陣中央柱から放射性炭素年代測定サンプルの採取に成功した。その成果は1632-1666 cal AD (信頼限界74.4%)である。吐蕃の年代ではなく、ドゥック派による国家形成期を示した点、大変興味深い。

研究成果の概要(英文)：Cliff monasteries are constructed at the several districts in Bhutan highlands and the meditation caves are established on the cliffs apart from the main hall called lakang. The monasteries had not the main hall, but only meditation caves and the monks were devoted to long-term meditation practice at the caves before 17th century when the nation state was founded. Its tradition have been inherited to nowadays. We have investigated 15 monasteries in total to understand the actual situation of such meditation caves. In Jambay Lakang monastery, which was transmitted to have been constructed by Srongbtsansgampo at the time when Tufan ancient Tibetan dynasty was founded at 7th century, we succeeded to get the sample of radio-carbon dating from inner sanctum central pillar of the main hall. The result is 1632-1666 cal AD (reliable limit 74.4%). It is very exciting that the result points not the foundation time of Tufan dynasty, but the time after the foundation of Bhutan national state.

研究分野：建築史・建築意匠

キーワード：ブータン チベット仏教 密教 崖寺 瞑想 懸造 放射性炭素年代測定 民話

1. 研究開始当初の背景

2010～12年度の科学研究費基盤研究C「石窟寺院への憧憬 - 岩窟 / 絶壁型仏堂の類型と源流に関する比較研究」(代表者・浅川、課題番号 22560650)により、日本各地の岩窟・岩陰型仏堂や懸造仏堂を調査しつつ、摩尼寺「奥の院」遺跡で発掘調査をおこなった。同時に、大乘仏教の伝播ルートを遡行し、中国山西の雲岡・天龍山石窟、甘肅の麦積山石窟・敦煌莫高窟・同榆林窟、新疆ウイグル自治区クチャの千仏洞群、西インドの窟院群を視察した結果、以下の諸点があきらかになっていた。

1)インドや中央アジアの石窟寺院は礼拝窟と僧房窟によって構成されているが、中国に僧房窟はない。2)大乘仏教では仏像の安置場所として石窟に執着が強い一方で、各地の石窟寺院 / 岩窟型仏堂のあり方は多様である。3)その地方的多様性については、「窟の建築化」という視点で理解できる。「窟の建築化」とは平地寺院建築の意匠を石窟に取り込む行為であり、インドでは紀元前から、中央アジアでは3世紀以降、中国では北魏の雲岡以降に顕在化する。4)華北の場合、正面に木造建築を設けて窟を塞ぎ、窟の内壁に木造建築の細部を彫刻するようになる。5)しばしば懸造と複合する日本の岩窟・岩陰型仏堂は平安時代中期(10世紀)まで遡りうるが、それ以前の状況は不明。6)日本の場合、窟の正面を木造の掛屋で塞ぐか、窟内に木造の懸造仏堂を納めるかのどちらか。後者は磨崖仏の多い大分(とくに六郷満山)に卓越し、華北石窟との相関性を匂わせる一方、前者は山陰に卓越し、福建省泰寧の甘露寺(南宋)に類例がある。

従前の研究によると、草創期の石窟寺院においては、僧房窟のみが存在し、後にストゥーパを祭る礼拝窟が僧房群とは別のエリアに導入される段階を経て、僧房窟と礼拝窟が複合化し、最終的には礼拝対象が仏像に取って代わられるというプロセスを想定できる。一方、上座部仏教やチベット系仏教では瞑想修行を重視しており、しばしば岩陰・洞穴・洞窟などを修行のための僧院としている。こうした状況を踏まえるならば、石窟寺院の起源と展開を以下のように捉えることができるかもしれない。すなわち、仏教の草創期、僧は岩陰・洞穴・洞窟などで瞑想修行に励んでいた。その行場としての伝統を上座部仏教やチベット仏教が継承する一方、大乘仏教では岩窟を建築化して内部に塔や仏像を祀る礼拝窟が中心となり、僧房窟は徐々に石窟か

ら離れ、独立して地上に設けられるようになる。

このような仮説を検証するには、インド方面の遺跡調査だけでは不十分であり、初期仏教の伝統を強く受け継ぐチベット系仏教や上座部仏教の洞穴 / 洞窟僧院の様相を見極める必要がある。しかしながら、その種の研究はまったく進んでいない。本研究では、まず大乘仏教の有力な一派であるチベット系仏教の洞穴僧院(瞑想洞穴)に注目する。しかも、チベットではなく、ブータンにおける洞穴僧院に一つの焦点を絞りたい。その理由はなにより、現在の政情においてチベットでの調査が困難であるという問題があり、さらにブータンは日本とよく似た生態系を背景にして木造建築が発展しており(チベットでは石造)、洞穴僧院と木造建築の結びつきが顕著だからである。ブータンの場合、仏寺本堂からやや離れた山崖の自然洞穴を木造の掛屋で塞いで僧院とし、瞑想修行の場とする。首都ティンブーからパロにかけての一带には数千の寺院が散在し、それに附属する洞穴僧院の数は夥しい。ニンマ派仏教の開祖、グル・リンポチェ(パドマサンババ)が8世紀に修行したパロのタクツァン僧院(標高3050m)も当初は岩陰と洞穴のみであり、12世紀以降に複数の祠堂・仏堂が建設されたとされ、周辺の岩崖に多くの洞穴僧院を伴う。こうした山林寺院の構成は、日本の密教系諸山における「奥の院」の構成とよく似ている。少なくとも建築的にみて、ブータンの洞穴僧院は日本の「岩窟+懸造」仏堂との類似性を強く感じさせる。日本の密教とチベット仏教はインド・中国で失われた後期密教の特徴をよく残す点で親近性があり、それが洞穴僧院(ブータン)と岩窟懸造仏堂(日本)との系譜に直結するわけではないにせよ、両者の相違を比較考察する学術的意義はおおいにある。

一方、上座部仏教における洞窟僧院は、管見の限り、ミャンマーのインレー湖周辺に集中的に分布している。インドと国教を接し紀元前後から仏教の浸透したミャンマーでは、寺院の中心はパゴダ(仏塔)であり、多くのパゴダが一つの僧院を共有する。僧院はパゴダ群から離れて独立化しており、洞窟を僧院にあてる例も少なくない。シャン州ヘイホー市のガンドイワテを例にとると、複雑に枝分かれする洞窟の一部を人為的に掘削して天窓や分室を設けている。自然の洞窟を人工化して瞑想修行の場とする一方で、ミャンマーの都市域では、ストゥーパの周辺に人工の疑似洞窟僧院を建造することもある。ミャンマ

一の洞窟僧院やブータンの洞穴僧院の配置・平面・形状・活用状況などを調査し、西インド方面の初期石窟寺院遺構と対比させることで、古代仏教遺跡の解釈に新しい知見をもたらす可能性が期待できる。

2. 研究の目的

本研究ではブータンの洞穴僧院とミャンマーの洞窟僧院を主な対象として、分布調査・測量・実測・年代測定などに取り組み、瞑想と瞑想洞穴の実態をあきらかにし、インド・中国・日本などに残る大乘仏教系の石窟寺院・岩窟仏堂と比較する。とりわけ、ブータンの瞑想洞穴にみられる懸造の木造建築部と岩窟・岩陰の複合関係をとくに日本と比較検討したい。

3. 研究の方法

ブータンの洞穴僧院については、仏堂内部の撮影等が原則禁止されているので、おもに崖寺境内の屋根伏配置図の測量をメインにおき、必要に応じて内部の略測等もおこなう。測量器材としては、DGPS とレーザー距離計・方位計（インパルス社）の複合器を使用する。ヒアリングについては、崖寺の縁起等に加え、瞑想体験を中心とする僧侶のライフヒストリーについての長時間の聞き書きをおこなう。このほか、可能な範囲で僧院建築部材の年輪サンプルを採取し、科学的年代測定を試みる。ミャンマーについては、鍾乳洞内を広範囲に利用して洞窟僧院が造営されており、今回は詳細な調査は断念し、予備的な調査にとどめる。

4. 研究成果

ミャンマーの洞窟僧院は鍾乳洞をおもに礼拝窟とするもので、夥しい数の寄進仏を窟内に安置するが、その一部に瞑想窟を含む場合もある。一方、チベット仏教ドゥック派を国教とするブータンでは、瞑想場としての崖寺が各地に造営されており、中心的礼拝施設ラカン（本堂）から離れた崖の洞穴に瞑想施設を営む。規模の小さい洞穴を利用し、その正面に懸造の掛屋を設けるだけの素朴な施設だが、密教修行の根幹をなす瞑想の場として現在なお重要な意味を担っている。そもそも、ドゥック派が全土を制圧して国家形成がなされる 17 世紀以前、瞑想場に本堂ラカンは存在せず、ただ瞑想洞穴だけがあって、僧侶たちは長期間の瞑想修行に没頭していたとされる。現在でも、若手の僧侶は修学時に 3 年 3 ヶ月 3 日の瞑想を窟内で続けることが必須である。一日の睡眠時間は 5 時間前後、軽食を 2 回とる以外はひたすら瞑想に集中する。

こうした瞑想と瞑想洞穴の実態を理解するため、計 15 ヶ寺を調査した。その結果、

崖寺境内の空間構成、本堂の構造と仏像の配置、瞑想洞穴の構造と地形・懸造との関係などがあきらかになった。

多くの僧院で古材の放射性炭素年代測定サンプルを採取した。年代測定の業者委託費が高額であるため、AMS サンプル 2 点のみの測定となった。うち 1 点はソンツェンガンポ王による吐蕃建国時（7 世紀）に創建したと伝承される中央ブータンのジャンバラカンで採取した本堂内陣中央柱のサンプルである。測定の結果は 1632-1666 cal AD（信頼限界 74.4%）である。吐蕃の年代ではなく、ドゥック派による国家形成期を示した点、大変興味深い。かりに瞑想場としての成立が吐蕃時代にまで遡るにしても、現本堂は国家としてのブータンが誕生して以後のものである可能性が高まった。なお、ダカルポ・ゲムジャロ寺のサンプルからもこれに近い年代が得られた。

2014 年からはクンサン・チョデン女史のブータン民話に係わる著作の翻訳にも着手している。クンサン女史はブータン初の女性作家であり、民話研究の第一人者である。2015 年にはウゲンチョリンの実家（現在は民俗博物館）でクンサン夫妻に面会し、翻訳成果を謹呈した。現在、正式な出版にむけて準備中である。民話の解説をとおして、元は遊牧民であった人びとの世界観と仏教の無常観との係わりを導きだしたいと思っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

吉田健人・浅川滋男 (2016)
「ブータンの崖寺と瞑想洞穴」『公立鳥取環境大学紀要』第 14 号：pp.51-70
浅川滋男・大石忠正・武田大二郎・吉田健人・浅川滋男 (2017)
「ブータンの崖寺と瞑想洞穴」『公立鳥取環境大学紀要』第 15 号（投稿申請済）

〔学会発表〕(計 3 件)

浅川 滋男 (2014)
「めざせ、ブータン - 洞穴僧院と瞑想修行」
公立鳥取環境大学公開講座、2014 年 8 月 9 日 @鳥取県立図書館大研修室
浅川 滋男 (2014)
「めざせ、ブータン - 洞穴僧院と瞑想修行」
公立鳥取環境大学公開講座、2014 年 8 月 23 日 @鳥取環境大学西部サテライトキャンパス
大石忠正・武田大二郎・浅川滋男 (2016)
「ブータン第 4 次調査速報」
第 1 回 仏ほっとけ会（摩尼寺・大雲院仏教講座）2016 年 2 月 21 日 @大雲院本堂

〔図書〕(計 3件)

クンサン・チョデン (浅川滋男監訳 2015)
『メンバツォ - 炎たつ湖』公立鳥取環境
大学保存修復スタジオ

クンサン・チョデン (浅川滋男監訳 2016)
『心の余白 - 私の居場所はありません
か?』公立鳥取環境大学保存修復スタジオ
清水拓生・宮本正崇・吉田健人・浅川滋男
「民族建築その後」, 日本建築学会比較居住
委員会編 『フィールドワークの系譜』昭和堂
(2016・印刷中)

〔その他〕

ホームページ等

【2012年度】

雷龍の彼岸 - ブータン仏教紀行(1) ~ (9)

(1)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-107.html>

(2)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-124.html>

(3)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-125.html>

(4)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-126.html>

(5)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-128.html>

(6)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-129.html>

(7)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-130.html>

(8)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-135.html>

(9)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-136.html>

【2013年度】

ドラフ巡礼 - ブータンの洞穴僧院を往く(1)
~ (15)

(1)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-416.html>

(2)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-415.html>

(3)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-419.html>

(4)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-420.html>

(5)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-414.html>

(6)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-418.html>

(7)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-424.html>

(8)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-417.html>

(9)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-421.html>

(10)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-427.html>

(11)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-429.html>

(12)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-438.html>

(13)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-439.html>

(14)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-436.html>

【2014年度】

天まであがれ - 東ブータン高地の遊牧的世
(0) ~ (3)

(0)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-746.html>

(1)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-748.html>

(2)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-757.html>

(3)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-751.html>

【2015年度】

スケッチ・オブ・ゴンパ - 第4次ブータン
調査(1) ~ (10)

(1)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1073.html>

(2)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1074.html>

(3)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1075.html>

(4)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1076.html>

(5)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1078.html>

(6)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1079.html>

(7)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1088.html>

(8)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1091.html>

(9)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1080.html>

(10)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1081.html>

トンマのプージャ

<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1096.html>

衝撃の放射性炭素年代 - 速報

<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1155.html>

遊牧の彼岸 - アムド高原の青い海(1) ~ (6)

(1)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1083.html>

(2)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1097.html>

(3)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1098.html>

(4)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1103.html>

(5)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1110.html>

(6)<http://asaxlablog.blog.fc2.com/blog-entry-1115.html>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

浅川 滋男 (ASAKAWA, Shigeo)

公立鳥取環境大学・環境学部・教授

研究者番号 : 90183730